

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0270600570	
法人名	有限会社 とわだサンライフ企画	
事業所名	沢田のグループホーム 和っふる	
所在地	〒034—0302 青森県十和田市大字沢田字田屋10-4	
自己評価作成日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 青森県社会福祉協議会	
所在地	青森県青森市中央3丁目20番30号	
訪問調査日	平成26年7月28日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>※和っふるのこだわりである、優しい目と和ませる笑顔で温かい家庭環境に努めています。 ※気づきを大切にし、「今、望む」ケアで、個々のその人らしさを尊重しています。 ※全スタッフが本人や家族との信頼関係を築き、共に支える家族でありたいと考えています。 ※地域住民とのふれあいを大切に、互いに支え合う関係を大事にしていきます。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>小学校と高校が目と鼻の先にあり、ホーム前の道路が通学路となるため、利用者が交通安全の旗を振って見送ったことがきっかけで、学童保育会との交流や、児童による地域芸能「鶏舞」の夏祭りの訪問が恒例行事となっている。 代表が管理者であり、住み慣れた地域の輪の中で、利用者一人ひとりに相応しい自立に向けたケアを提供しており、職員が優しい眼差しと笑顔で利用者の暮らしを支えようと、理念や運営姿勢を掲げて、前向きに取り組んでいる。また、生活記録とセンター方式アセスメントを日々書き足しながら、利用者の言葉や様子を「気づきノート」で収集し、利用者を今より更に深く知ろうという姿勢で取り組んでいる他、避難誘導訓練をあらゆる場面を想定して月1回実施し、その都度、検証しては振り返りを行って、有事に備えている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝の申し送りでホーム理念と地域理念を唱和することで、高い意識を持ち、ケアに臨んでいる。他に、毎月、短期目標を掲げて取り組み、毎月の会議にて反省もしている。	利用者が地域の輪の中で、これまで通りの暮らしを継続していくための支援と、その実現を意識したケアで利用者向き会おうと、理念や運営姿勢を掲げている。生活環境の充実を目指し、スタッフ会議で振り返りを続けながら、職員一人ひとりが常に初心に立ち返る柔軟な対応を維持し続けるように努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会の祭りに参加をしたり、近くにある高校や小学校の行事での交流(運動会、文化祭、廃品回収への協力)を続けている。散歩をしながらのごみ拾いや、朝、通学路にて児童の交通安全見守りを実施する等、日常的につながりを持つことを意識しながら過ごしている。	ホーム前の通学路を通る小学生や学童保育会との交流、中高生の職業体験や定期的なボランティアの受け入れの他、夏祭りでの小学生の鶏舞の訪問等が恒例行事となり、定着している。また、地域包括支援センターとの連携で、中学生を対象とした認知症講座に管理者が関わったり、避難訓練には隣近所の住民が加わる等の関わりにも発展している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の高校生のボランティアや中学生の職場体験の受け入れはもちろん、地域包括支援センターの担当者と中学校に出向いて認知症講座を開き、接し方等を伝えている。また、ホームの夏祭りには地域の方や子供達も招き、ホームでの生活を伝えつつ、一緒に楽しめるよう工夫している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	認知症施設の理解を深めるための議案を挙げ、メンバーの方の意見を聞き、運営やケアの見直しにつなげている。外部評価の取り組みや結果についても何度も説明を行い、助言もいただいている。2ヶ月に1回設け、意見交換ができ、助言、見直しにつなげている。	全家族に毎回、会議の案内を送り、参加を促している他、近隣4地区の代表や地域包括支援センター職員等の参加も得て、2ヶ月に1回、運営推進会議を開催している。また、利用者と共にメンバーも加わって避難訓練を実施したり、災害対策や認知症、口腔ケア等をテーマに掲げ、活発な意見交換が行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	推進会議への出席や福祉に関する市の情報を提供していただき、アドバイスもいただいている。外部評価の結果も報告して、ホームの実態を把握していただいている。最近では認知症のテーマの研修を多く開催していただき、勉強になっている。	地域包括支援センター職員が毎回、運営推進会議へ参加している。また、地域包括支援センター職員と共に中学校で認知症講座を開催したり、地区高齢者参加の認知症模擬体験にも加わる等、認知症高齢者が地域で生活しやすい環境を目指し、連携体制を確立している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルを作成し、全職員が身体拘束をしない、させない事の理解に努めている。玄関前は交通量が多いことから、事故防止として、スイッチで開くように設定し、ドアが開くとチャイムで知らせるようになっていたことを家族へ説明し、了解を得ている。ホール窓は施錠せず、洗濯干しや花の水やりにも、庭へ自由に出入りできるように配慮している。	身体拘束は行わない姿勢で取り組んでおり、マニュアルややむを得ず行う場合の説明・同意書の様式もあり、スタッフ会議で具体的な日常ケアを題材に、実践的な学習も行われている。ホーム前は市道に面しており、交通量が多いため、家族の了解を得て、玄関は中から職員がスイッチで開閉すると、チャイムが鳴る仕組みとなっている。また、外出したい利用者には必ず職員が付き添って散歩し、気分転換ができるように支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修や内部の勉強会にて日々のケア方法を見直し、虐待防止への意識を高めている。法令遵守の説明の際も、疑問に感じた時は声に出し、見過ごしてはいけない問題と認識させている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社協職員を講師に招いた勉強会では、参加した家族や推進委員の方が制度を知り、利用につながったケースもあり、社協担当者とも連携をとり、支援できている。今後も定期的に虐待等の勉強会も実施する予定である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約時には代表や管理者が必ず立会い、十分な説明を行い、不安や誤解のないよう配慮し、同意を得ている。運営内容変更時も説明し、同意を得ている。その他、必要に応じて説明をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者の日常の言動から気づけるよう観察し、家族の面会時には、意見・要望をさりげなく聞き出せるよう、話しやすい雰囲気づくりを心がけ、信頼関係を築けるようにしている。意見箱も設置しており、家族の推進会議や担当者会議への出席の際も、率直な意見を聞くことができ、ケアの向上につながっている。	日々、利用者の小さな変化や言動を見過ごさず、家族との対話の中から思いを察しながら、職員の「気づく」力を養おうと努めており、担当職員からは毎月、利用者の近況や受診状況等についても報告がなされている。職員は小さな不満等にも誠心誠意、迅速に対応し、異動についてはその都度、面会時に口頭で報告している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議には代表も出席し、職員の声を聞く機会がある。また、日常の業務の中でも、職員からの意見や要望に対して、きちんと向き合い、話ができる環境がある。	代表が管理者のため、日常業務に精通しており、職員が直接、意見や提案ができる環境が整っている。月1回のスタッフ会議には全職員が参加し、中身の濃い話し合いが持たれ、活発な意見や提案が飛び交う機会となっている。また、管理者は職員の個人的な事情に配慮し、働きやすい環境の整備に努めており、職員の団結力の源となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、個々の仕事に対する考えに理解を示し、家庭環境を考慮して、希望に沿った勤務体制をとっている。福利厚生にて、年1回の健康診断や、月1回、整体師の方が来所して整体を受けられる体制があり、リフレッシュする機会を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修にはできるだけ参加し、個々のレベルアップを図っている。研修後は資料や報告書で振り返り、人前で話す発表の場として、内部の勉強会を行い、質の向上へ向けて取り組んでいる。会議等の進行役も毎回変えて、スムーズにまとめながら進行させるための機会も設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内に系列施設のショートステイがあり、その他にも交流しているグループホームもあり、双方を行き来できる良好な関係ができています。入居者が一緒に出かけたり、職員は勉強会にも参加し、意見交換やスキルアップの機会となっている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には本人と面談をしておき、さりげない会話から緊張をほぐし、思いや要望を引き出している。コミュニケーションを大事にして、信頼関係を築くように心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前には必ずホームの見学や説明をしておき、家族との面談や連絡を十分に行っている。家族の身体的・精神的負担を理解し、信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	十分な面談をした上で、必要とされる支援が受けられるよう、担当ケアマネや他の関係機関と連携をとり、対応している。車椅子が必要な時は改めて購入せずとも、社協での貸し出し制度についても伝え、使用されている方もいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のできる事、できない事を見極めて、掃除や料理の下ごしらえ、創作活動を一緒に行いながら、日常生活に寄り添い、支え合い、職員は入居者に対し、尊敬と感謝の気持ちで日々、過ごしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の暮らしぶりを面会時や毎月の手紙でお伝えし、状況に応じて面談を持ちながら意見交換をし、日々の生活を共に支えている。家族参加の行事で一緒に過ごす時間を作ったり、居室には家族の写真を飾る等、一番の身近な人であることがわかるように工夫している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔の知人の面会があったり、在宅時にお世話になった民生委員からの電話が定期的にある等、継続した関係がとれている。外出支援にて自宅訪問したり、長年行きつけの美容院に家族が連れて行ったり、友人宅に連れて行く等、個々の関係支援に努めている。	センター方式アセスメントを日々書き足しながら、利用者の生活歴や交友関係を把握し、知人宅を訪問して食事を楽しんだり、担当の民生委員との交流が続いている。また、携帯電話を持ち、家族からの週1回の電話を楽しみにしたり、以前お世話になった施設の職員に手紙を出す等、これまでの馴染みの関係を継続できるように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の生活歴や性格、日々の生活リズムを把握し、気の合った入居者同士が話しやすいよう、席の配置に工夫している。居室でおしゃべりを楽しんだり、共同作業を行うことで、良好な関係ができ、下膳もしてくださる方もいる。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も、家族や関係施設の職員の方等から、健康状態や状況の把握に努め、快適な生活を送れるよう、必要に応じて、相談や情報提供を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりに寄り添い、本人の立場に立ち、何気ない言動に目を配り、本人の思いや意向に気づけるよう心がけている。気づきは、「気づきノート」へ書き、職員全員で検討し、その人らしく過ごせるよう対応している。	暮らしの中で利用者が発信する小さな信号を聞き逃さないよう、「気づきノート」に記録しており、全職員が共有し、掘り下げることで、利用者を今よりもっと知り、寄り添いながら、その人らしい暮らしを継続できるよう、支援に努めている。職員は利用者と同じ目線でホームでの暮らしやケア場面を見渡し、振り返りながら、日々の支援に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を活用し、生活歴や環境等を把握するよう努めている。家族や知人の面会時にもプライバシーに配慮して、さりげなく聞き、これまでの暮らしに近い生活ができるよう努めている。一人暮らしでほぼ身寄りが居ない場合も現状としてあるが、言動等から汲み取り、ケアにつなげることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間シートを使い、日々、心身の状態を把握している。スタッフ会議にて、できる事は現状維持、できない事へは支援をということで共通理解をして、個々の生活のケアに努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日の実践記録、月1回のモニタリングを通じ、ケア会議を行っている。担当者会議では、本人や家族の意向、職員の気づきを取り入れ、現状に伴ったプランを6ヶ月に1回、作成している。状態変化があれば、その都度、見直しをしている。	担当職員と計画作成者により利用者や家族の意向を反映させた原案が立てられ、ケア会議にて全職員で話し合いの上、介護計画を作成し、更に、家族を含めた担当者会議により、家族の意向の再確認が行われている。介護計画は6ヶ月毎に更新され、毎月の評価も行われており、利用者の状態変化に応じた再アセスメントと見直しも行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一日の生活状況がわかるように、24時間記録している。個別ファイルには項目で色別し(受診記録は別項目で更にわかり易く)、その時その場面の様子がわかるように、行動や会話を記録し、全職員が情報を共有できるよう工夫している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々のニーズに合わせて、受診の付き添いや送迎等、柔軟に対応している。また、行事としてはなく、買い物や自宅への送迎、天気が良い時等に気の合った入居者同士で夕食やドライブに行けるよう、嗜好に合わせて対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣高校から定期的にボランティアの学生が来ており、行事の協力や交流を図っている。災害時や緊急時には協力が得られるよう、近隣の方や推進委員へ働きかけ、消防署や消防団との連携を取っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	できるだけ入居前からのかかりつけ医への受診を継続している。病状により、他の医療機関を受診する場合には、かかりつけ医や本人、家族と相談を行い、適切な治療が受けられるように支援している。受診結果は家族にも報告している。時には家族もスタッフと同行し、状況を把握して下さっている。	入居前の受療状況を把握し、かかりつけ医への継続受診を支援している。また、認知症専門医や眼科の受診の他、訪問歯科の診療が定期的に行われ、口腔ケアに力を入れた取り組みも行われている。受診記録は経過的に記録されていて、一目で状態がわかるように工夫されており、体調変化の把握や緊急時の対応が適切に行われる仕組みを整えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員が2名おり、日々の健康観察での変化や気づきについて、いつでも相談ができ、緊急時にはすぐに対応できる連絡体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院治療が必要になった場合に備え、定期受診時より、常に本人の状態を報告し、適切な治療ができるように連携を図っている。入院時は認知行動は細かく伝え、また、面会に出向き、速やかな治療、回復、退院に向けて、医療機関と情報交換を行い、本人が安心できるよう声がけしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在、終末期の対応をしていないことを、入居前の契約時に、本人・家族へ説明している。また、重度化した場合のホームでできる対応についても家族と話し合いを持ち、意向を確認している。終末期のあり方については、内・外部の研修を通じて、全職員で話し合いを持っている。	重度化や終末期の対応は行っていない旨、ホームの方針を契約時に説明し、日常的な健康管理や状態変化に応じた対応がとられる体制を整えている。また、医療処置が必要となった場合は医療機関や施設と連携し、適切な処置を受けるための紹介支援が行われ、その都度、家族の意向を確認しながら支援を行うこととなる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルの作成や見直しをし、緊急時の対応に備えた連絡方法の訓練や、応急処置についての普通救命講習の受講をしている。消防署員を講師に招き、施設内で起こり得る事故を想定した勉強会も実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルの作成や見直しをし、月1回、あらゆる想定で避難訓練を実施して、結果、反省を基に体制づくりの強化を図っている。消防署員が立会い、地域の方参加の火災訓練も行い、問題点についても話し合われている。緊急時の連絡体制や地域の協力体制、備蓄の確認をしている。最近では、冬場・夏場時の停電断水も想定して、訓練をしている。	近隣住民の協力の下で行う法定避難訓練の他、条件や想定を変えながら、毎月、自主的な避難誘導訓練を続けており、夜間想定のみならず、災害時の停電・断水を想定した訓練も行っている。消火器やスプリンクラー、避難路も確保され、災害時の暖房器具や発電機、3日分程の食料品や飲料水も備蓄しており、井戸水も確保されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々を尊重し、羞恥心に配慮した声がけや、さりげないサポートを心がけている。自分達がされて気持ちが良くない言動は決してしないよう、配慮した対応をするように心がけている。	利用者が歩んできたこれまでの経験に基づき、一人ひとりの感性の違いやこだわりを受けとめながら、職員自身がサービスを受ける利用者の立場に立ちながらサポートできるよう、心がけている。更に、利用者から発信されるあらゆる情報を「気づきノート」に収集し、利用者主体のケアを目指して取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常会話から思いや希望を引き出せるよう、コミュニケーションを図っている。言葉で表現できない方でも、アイコンタクトや筆談で、自己決定できるように選択肢を用意し、入居者が自分で選べるように工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活リズムを全職員が把握しており、ホールで入居者同士で談話する方や、居室で新聞を読んだり、編み物をしたり、自由に過ごしている。畑を見に行きたいという方には同行する等、常に入居者の希望に沿えるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族面会時に居室で散髪されたり、行きつけの美容院へ出かけたり、ホームの理髪サービスを利用する等、個々に支援している。自分で衣服交換を思い思いに行ったり、ショルダーバッグを持ち歩く方もおられたり、クリームやお化粧品をご自分でされる方もおられる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	気の合う入居者同士や職員が、会話を楽しみながら食事ができるように、座る位置を工夫し、天気の良い日は気分を変えて、庭での食事も行っている。茶碗や箸、湯飲みは使い慣れた馴染みの物を使い、食事の準備や片付けは、個々の力量に合わせ、助け合いながら行っている。	彩りや季節感を大切にしたり盛り付けを工夫し、献立表には食後の感想や利用者個々の反応等が記録され、利用者の嗜好の把握や調理法の工夫に活かされている。利用者、職員共に和気藹々と同じ食事を摂っており、利用者も食材の下ごしらえや食器拭き、テーブル拭き等を行って、楽しみながら食卓を囲んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取の記録、観察をし、一人ひとりの嗜好や食べられる量を把握している。おかゆや刻み、塩分制限者には薄味等、個々に合わせた調理方法で提供している。食器の大きさや盛り付けにより食事が進まない方も居るので、工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりに応じて、声かけや誘導、仕上げ磨きを行いながら、口腔内の観察に努めている。歯科医の往診にて、検診と口腔内ケアについて、指導をいただいている。口腔内体操を行い、誤嚥防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	観察・記録にて、排泄パターンを把握し、事前誘導を行い、トイレで気持ち良く排泄できるように努めており、更には、日中、リハビリパンツから布パンツになった方も居る。。羞恥心が強い方には行動を察し、さりげなく対応している。	一人ひとりの排泄パターンを記録・把握することで、適切な誘導や支援に活かされており、リハビリパンツから布下着に改善された利用者が多くなっている。直接的な物言いを避け、利用者毎に相応しい誘導と、自然にトイレに向かえるような心配りのあるケアを心がけている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一人ひとりの排便状況を観察・記録している。運動や水分の種類、また、食事の工夫をし、予防に努めたり、家族がサプリメントを用意してくれる方もいる。どうしても便秘が続く場合は主治医へ相談し、整腸剤や下剤にて調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	午前に入浴し、午後はゆっくり休む生活リズムがある。個々のペースに合わせ、1対1で対応し、ゆったりと入浴ができるように配慮している。入浴拒否や体調不良時には、無理強いせず、本人に合わせ、希望やタイミングを合わせている。	1対1の介助により、利用者個々の習慣に沿った入浴を支援しており、介助を拒み、一人で行いたい利用者にもさりげなく様子を窺う等、利用者が安全に清潔を保持できるよう支援している。水虫への処置のために入浴できない日に足浴を行ったり、入浴拒否の利用者には家族に協力をお願いする等して、柔軟な対応に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は居室や和室にて昼寝をしたり、ソファで横になる等、それぞれに居心地の良い、過ごしやすい場所がある。寝る前に読書したり、テレビを見て過ごす方もいる。夜間は個々に合わせた照明にしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容を理解し、主治医の指示通りに服薬支援している。誤薬ミスのないよう、氏名シートを使い、職員同士で確認した上で、個々の力量に合った手渡しや、口に入れる、飲み込むまでの確認をしている。服薬後の症状変化を観察し、受診時に報告している。また、在宅から入居になった方の薬の種類等、医師に相談することで、状態が安定された方もいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活での習慣を把握し、趣味、楽しみ事を活かし、個々の能力に合わせた支援をしている(家事、掃除、花の手入れ、編み物や縫い物、読書、ゴミだし等)。誕生日には好物でお祝いしたり、新聞の好きな記事の切り取る等、満足していただけるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の入居者の状況を見て、できるだけ散歩やドライブで、戸外へ出るように支援している。ボランティアの協力で地域の祭りや学校行事に出かけたり、家族の協力でねぶた祭りや、自宅や友人宅への外出・外泊ができています。	隣接する地域の集会所で行われる秋祭りや、近くの郷土館に向いたり、学童保育会の児童と交流している他、近所を散歩しながらゴミ拾いをしたり、近くの景勝地へドライブに出かける等、できる限り戸外で出て、利用者の気分転換を図っている。また、交流のある他グループホームとの行き来の他、家族の協力を得て墓参りをしたり、受診帰りに自宅に寄ることもある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ドライブや買い物に出かける時は、家族と相談の上、本人の力量に合った額を所持していただいているが、中々、購入まで至らないのがほとんどである。切手やハガキを購入され、お手紙を書いている入居者もおられる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	週に一度、娘さんからの電話を心待ちにしている方もおり、日常的に電話をかけられる体制にしている。家族からの手紙(電報含む)や贈り物に対して、電話やお手紙でお礼を伝えたり、良好な関係支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には季節を感じられる花や装飾品でまとめるようにしている。入居者手作りの暦を月毎に工夫をして、壁には行事写真等を掲示している。天窓からは明るい日差しと共に、ホールに入居者が集まってくると空間となっている。時に、眩しさに対してはロールカーテンや座る位置の配慮をして、湿度・温度も定時に測り、快適に過ごせるよう努めている。	ホールと全居室に温・湿度計を設置し、快適な空調となるように管理されている他、ホールは天窓からの自然光で明るく、日射しを考慮して、テーブルやソファの配置換えも適宜行っている。食事中はテレビを消して音楽を流し、落ち着いた雰囲気を保っている他、季節の花を生けたり、季節に応じた飾り付けも行い、居心地の良い共有空間づくりに取り組んでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファを置き、家族との談話を楽しむ方や、入居者を招き入れて会話を楽しまれる方、テレビを鑑賞する方等、自分のペースで過ごせるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の間違いがなく、個々に工夫した手作りの表札を目線の高さに付けている。また、新聞や本を読む方も居れば、思い出の写真(遺影も含む)や鉢花を置き、お世話をしたり、洗濯物干しを置いて自分で行う等、落ち着いた過ごせるような居室づくりに努めている。	居室毎に工夫を凝らした表札が飾られ、利用者の目線の高さに合わせて取り付けられている。遺影を置いて花を飾ったり、観葉植物を育てている他、家族の写真を見やすく掲示したり、筆筒の中身が絵で見分けられるように工夫され、その人らしい居室づくりを支援するために、担当職員の配慮がたくさん盛り込まれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内にて歩行や車椅子も自走できるよう、危険な物を置かないようにして、個々のその時々で変化する力を発揮できるよう、環境づくりをして、自立に向けて支援をしている。(廃品回収の手伝いおトイレの場所まで掲示をみて自分で行く等)		